

UNCCA 10周年に際して

前幹事長 中村 安弘

宇部市地球温暖化対策ネットワーク（UNCCA）が、めでたく設立10周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。

UNCCAは、産官学民の協働による宇部市における地球温暖化対策の推進を目標に、2002年に設立されたが、設立当初は、産、官、学、民のお互いの立場の違いから、活動方針を巡り激しい議論も珍しくなかった。しかし、徐々に協働の場へと成長し、活発な活動が行われるようになった。これも、中西弘代表の一貫したご指導と、幹事、委員、事務局の皆様方の目標達成に対する真摯な熱意の賜物と、心より感謝申し上げます。



2007年総会で発表

温暖化が進行すると、気象は荒々しさを増すとされている。近年、記録的な局所的集中豪雨が頻発しているが、この原稿を書いている今も、吹田市では、これまで経験したことのないような強風と雷雨に見舞われている。ひっきりなしに地上に延びる稲妻の閃光と轟く雷鳴の中、強い雨脚は、幾筋もの白い帯となって、恐ろしい勢いで真横に流れている。目の前の吉志部神社の森の木々は激しく揺れ、一斉に白い葉裏を見せながら大きな白い波となって騒いでいる。台風でも経験したことのないような激しさである。半世紀前には、最高気温が35℃と聴くと皆驚いたものであるが、今や37℃を超えることも珍しくない。熱中症で倒れる人も増加の一途である。また、竜巻の被害は遠い米国での話と思っていたが、わが国でも現実のものとなっている。

これまで、重大な環境問題の多くは、その予兆が現れても抜本的な対策が遅れることにより、顕在化し深刻な社会問題になってきた。地球温暖化問題は、その深刻さ、時間的・空間的スケールの大きさから、国連の気候変動枠組み条約締約国会議を中心に世界的対応が模索されているが、先進国と発展途上国間の軋轢や各国の経済戦略等の理由から、世界的に十分な対策はまだとられていない。現在の地球温暖化の影響は顕在化の端緒に過ぎず、これから益々深刻化することが真実味を帯びている。

2011年3月に我が国は、東日本大震災・津波による福島第一原子力発電所のメルトダウンと放射能漏れと言う、極めて深刻な国難に遭遇し、我が国におけるエネルギー戦略の見直しが迫られている。このようなときにあつて、国を挙げての節電努力に、国民が一致協力してその成果を上げていることは、国民の節電や省エネルギーに関する意識向上が如何に大切であることを示している。

UNCCAの役割は、再生可能エネルギーの導入や省エネルギー行動に関する市民一人一人の意識向上を支援し、まずは各家庭での二酸化炭素排出量削減の行動を起こし、その市民一人一人の意識が、企業、地域社会、国の行動に反映され、我が国の二酸化炭素排出量削減に貢献することである。非常に困難な時ではあるが、UNCCAの存在意義と社会貢献の重要性は益々高まっている。更なるご発展とご活躍を心より期待しています。